

ながら本文の中でみてきたように実用に耐えるのは、初期場及びその場の経過に依存するものの、数日程度と思える（これは一般的に言われていること）。これは何を意味するのだろうか。現在のモデルの精密化により、幾分の予測精度の向上は期待できようが、大きな飛躍は望めそうにない。なにか越えるべき壁がたちはだかっているようで、従来とは違った観点、アイデアによる展開が必要であるように思われる。1つのアプローチとしては素朴ではあるが、たとえば第1図で示したが、日々の気象場はいつも同じ予測精度をもつものでなく、精度のよいときとそうでないときがあり、この由来の解明等を徹底する等も1つかと思われる。

現在これら大気の予測可能性も含めて延長予想に関しては、国際的に多くの人達が鎬を削っているわけだが、近い将来にブレイクスルーが起こるだろうか。それとも、全くコソコソとした積み重ねによってのみ進歩があるのだろうか。結論は依然ペンディングのままのように思われる。

参考文献

- Sumi A. and Kanamitsu, M.: 1984: A Study of systematic errors in a numerical weather prediction model. J. Met. Soc. Japan 62, 234-251.
- 住 明正, 1985: 系統的誤差について (Systematic error), 電子計算室別冊, 31, 8-16.
- 岩崎俊樹, 1985: 冬季シベリア高気圧についての考察, 数値予報解説資料, 18, 21-32.
- 大関 誠, 1986: 北半球モデルの系統的誤差について, 数値予報解説資料, 19, 36-51.
- 萬納寺信崇, 1988: 全球モデルの統計的検証, 数値予報解説資料, 21, 20-29.
- Kato, M., The characteristics of systematic errors shown in the composited maps of 1 to 6-day predicted fields of 850 hPa temperature and 500 hPa GPH of both JMA and ECMWF models, カナダのトロントで1988年9月開催された「Workshop on Systematic Errors in Models of the Atmosphere」の事務局に投稿, 未発行.



土質工学会編 「土質工学と気象」

(株)土質工学会, 1990年刊
A 5 版, 311頁, 4,200円

土質工学会から発行されている土質基礎工学ライブラリーの1冊として「土質工学と気象」という本が1990年6月に発行された。気象の関係者にとってちょっと見慣れない書名であるが、内容をみるとこの本は土質工学者のための気象学と、土質工学に関連した気象学の2つのテーマを1冊にまとめたものであることがわかる。

まえがきには「土質工学で扱う土は、気温の変化、降雨、雪、乾燥、風、波浪などの気象変化によってさまざまな影響を受ける。したがって、設計段階や施工段階においてもこれらの影響をできる限り正確に把握し、適切

なる対応をする必要がある。気象に関する文献は数多く出版されているが、土質工学と結びつけ系統だててまとめられている文献は数少ない。本書の内容は、気象に関する基礎的な知識を分かりやすく述べるとともに、気温、雨、雪といった個々の気象による諸現象と、これらに対応する土質工学の諸計画を体系的にまとめている・・・・」と述べられている。

目次を示すと

1. 概論, 2. 気象に関する基礎知識, 3. 土質工学と気温, 4. 土質工学と雨, 5. 土質工学と雪, 6. 土質工学と波, 7. 土質工学と風, 8. 資料編, となっている。

土に関連した気象現象を扱う場合に、土に関する基本的な知識を手軽に得ることが出来る本である。

(気象研究所・藤谷徳之助)